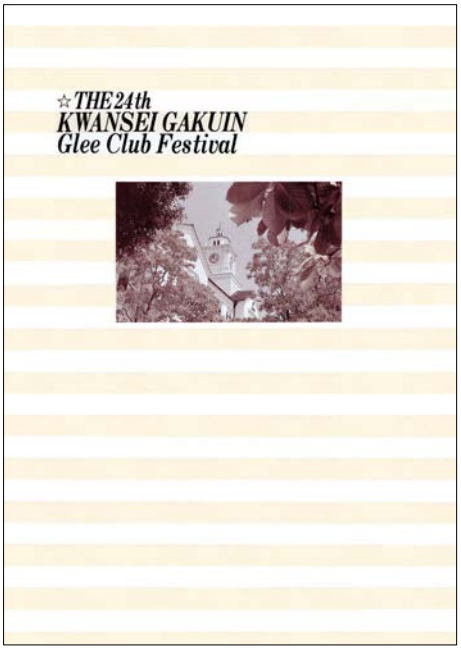
第24回関西学院グリークラブフェスティバル【1991年（平成3年）10月6日】

大阪厚生年金会館中ホール



Ⅴ．合同演奏

男声合唱組曲「富士山」

1．作品第壹　　作詩／草野　心平
2．作品第肆　　作曲／多田　武彦
3．作品第拾陸　　指揮／北村　協一
4．作品第拾捌
5．作品第貳拾壹（宇宙線富士）

「北村協一とその偉大なグリークラブ・ファミリーに捧ぐ」

作曲家　多田　武彦

昭和29年１月24日、関西学院グリークラブ第22回リサイタルで、北村協一は学生指揮者として組曲「月光とピエロ」を演奏した。

私が北村協一の音楽に接したのは、このときが初めてである。

関学グリーの伝統美の上に、北村協一のけれん味のないオーソドックスな解釈が加わって、この名曲の模範演奏がおこなわれたような印象を受けたことを、今でもよく覚えている。

彼のこの正統性と堅確性は、40年近く経った今も、彼の音楽の中枢部に生き続けている。そして、この歳月の間に、彼自身の研鑽（けんさん）によって、実に幅広い芸術性に高められていくことになるのだが、私から見て彼のパーソナリティーは、次の点にも鮮烈である。

数多くの外来名演奏家たちは、日本の歌舞伎を観て、その間（ま）の芸術を肌で感じる。間は、単なる休止符ではなく、時間と空間を支配しながら流れていく芸術のすべてにおいて、その機微を表わすのに不可欠な要素であり、どちらかというと西欧の人たちが苦手とする部分でもある。

幼い頃から歌舞伎を観る機会の多かった北村協一は、ただ観るだけでなくこの芸術の凄まじいばかりの力学を、彼自身の天職の中に活かしつづけてきた。彼の奏でる音楽が、だらだらすることなく、常に整然と、滅張（めりはり）のきいたものとして、聴衆に受けとめられるのもこのせいであろう。

更に、歌舞伎からの影響として感じられるのは、彼の演奏における劇的構成力である。うっかりすると、宗教音楽もポピュラーも邦人作品も、どれもみな同じように演奏している指揮者が多い。しかし一度、北村氏の棒が動くと、それぞれの音楽の特色が忽ち前面に押し出される。したがって、一夜、すべて彼の棒で奏でられる演奏会を聴くと、まず、ステージごとに特色が出る。つぎに、一つのステージの中での数曲の間に起承転結がある。そして一つの曲の中に感動的な抑揚があり、動と静が支配する。これらの数え切れない要素の選択と順列組み合わせによって、詩や曲の精神的内容が、歪むことなく客席に送りこまれる。

そして最後に言葉である。音に重きをおくために何を言っているのか解らぬ歌曲も聴き辛いし、逆にやたら言葉あそびが過ぎて、これがどうして音楽なのだと首をかしげたくなる歌曲もあるが、一たび彼が選んで奏でた曲は、きちんと聴けるから不思議である。

ある所では音に、ある所では言葉に、ある所では双方に適切な割合で重点をかけて、北村協一は演奏していくからであろう。

歌舞伎も奥が深い。合唱音楽も奥が深い。（特に日本の合唱の場合、音楽の三大要素の一つである「和音」不在の演奏が多い。この色彩美を定着させるだけでも奥が深い。）

還暦を迎えて、「還暦」という言葉を余り好きでない北村協一は、ひそかに針を０（ゼロ）に戻した筈だ。これからいよいよ北村協一の棒が、一段と冴えかえる。そうした意味でも彼にとって郷土というべき関西学院グリークラブ・ファミリーから祝福を受けながら、このステージに立つ北村協一は、何という幸福者（しあわせもの）だろう。未来に向って、冴えわたる棒の閃めきを、私もじっと、見続けて行きたい。